物語の力をかりて理想の図書館を描く

ー『夜明けの図書館』制作過程を交えてー

漫画家
埜納（ののう）タオ

「“レファレンス・サービス”をテーマにした図書館マンガを描いてみませんか？」。前任の担当編集者が提案してくれた企画を請け『夜明けの図書館』というマンガを2010年に立ち上げました。地方の架空の公共図書館を舞台に新米司書葵ひなこが奮闘するお話です。シリーズ連載当初はここまで長く，深く，本気でこの作品に関わっていくとは思いもしていませんでした。そもそも“レファレンス・サービス”が何かも知らず，“図書館の仕事”への関心も薄かった，というのが本音です。

いくつかの取材先で，現場で働く図書館員の方の生の声を聞くうちに“レファレンス・サービス”と“図書館の仕事”への興味が増しました。併せて“図書館で働く人”にも大きな魅力を感じていくようになりました。

物語のドラマにあたる部分はフィクションですが，作中で描かれる図書館業務や現場での対応にはリアリティを持たせたく，下調べや題材選びは取材等を通して編集者と入念に行っています。第6話から，公共図書館に長期勤務経験のある協力者：吉田倫子氏の助言を得る事ができ，仕事マンガとしてのクオリティを高めることができたように思います。

マンガの中で，大きな軸として中心に据えているのは“レファレンス・サービス”ですが，その他に一般的にあまり認知されていない図書館ならではの業務も物語に取り入れています。たとえば，医療・健康情報サービス，ハンディキャップサービス，多文化サービス等です。本大会参加者のみなさまにも，きっと関心をもっていただける分野だと思います。ナイーブな問題を扱ったテーマなので，制作中に何度も行き詰まりましたが，編集者と協力者のバックアップで描き上げることができました。

主に，それらの制作過程を交えながら，私自身の気付き・心掛けていること，物語に込めたメッセージ，『夜明けの図書館』が目指す図書館像等，お伝えします。